

# 人生を拓く

62

橘高和

子さん(84)  
西町3

和子さんは三浦茂信さん(74歳没)とワ  
ミさん(45歳没)の6人兄弟の長女として  
利尻島で生まれました。父は結婚のため、  
明治に秋田県から利尻島に渡り漁業に従事。  
和子さんが小学1年生のとき、炭鉱夫に転  
職し家族で樺太・西内淵(当時)へ。冬は  
当然北海道より寒く、忠別川より幅広の川  
が深さ1.5mまで凍った上を歩いて通学して  
いたとか。1945(昭和20)年8月の終  
戦から半年間は、「父が現場監督の合間に  
作ったどん菓子をロシア人に売って歩いた  
のが楽しかった」と振り返ります。終戦の  
翌年には北海道に戻ってきました。小6の  
時です。

戦後の混乱の中、親類を頼って3ヵ月ほ  
ど転々としたのち、戦後開拓者として美瑛  
町郎根内(ろうねない)に落ち着きました。  
中学1年生の秋から通った学校へは片道4  
キロで、「冬は馬ソリや丸太運搬トラック  
に乗せてもらった」と懐かしみます。中3  
の時に母が病死すると、残された妹や弟の  
世話をする毎日でした。

18歳の時、美瑛の知人に勧め  
られて結婚することになる  
も、相手の顔も知らないまま  
式当日を迎えました。夫・春  
義さんは10歳年上の当時28歳。  
嫁ぎ先は両親や弟・妹もいる  
9人家族で、何もかもわから  
ない中、初めての水田づくり  
など苦労は絶えなかったそう  
です。



農業を営んでいた春義さんは、和子さん  
の妹夫婦が木彫り職人だったことから、そ  
の技術を義弟から教わり、1906(昭和  
39)年に東神楽町志比内に共同で民芸品製  
造工場を開業。1968(昭和43)年には  
丁度良い物件のあった東川に工場と住居を  
移しました。和子さんも熊の木彫りをする  
日々でしたが、やがて民芸品の最盛期が過  
ぎると「これでは食べていけない」と町内  
の家具工場に勤務し、足腰を痛めながらも  
60代まで働きました。

間もなく春義さんが脳梗塞で入院すると、  
介護のため1年間毎日、旭川市内の病院に  
バスで通ったそうです。退院後の9年間は  
介護の日々でした。春義さんが81歳で穏や  
かな顔で最期を迎えた際、娘さん2人から  
「母さん、今まで父さんをよく見てくれた  
ね」とねぎらいの言葉をかけられ、涙が止  
まらなかったそうです。

娘2人と息子1人、孫3人、ひ孫2人に  
恵まれた和子さんは、その後ずっと心の支  
えになっていた宗教活動やシ  
ニアクラブなどにも積極的に  
参加していますが、なんと  
いっても昔から「唄うことが好  
き」。また何より人と話すの  
が大好きで、顔見知りの家を  
訪れたときの第一声は「まあ  
お入んなさいよ」。苦労を重  
ねた人は、人を迎え入れる度  
量も大きいようです。

## 俳句

夏限定ちびちび忘れジジの酒	佐々木
コンサート家族巻き込む春の暮	本 田
郭公四方にこだましウド採りぬ	齋 藤
極上のほっぺの横で三尺寝	山 内
ドロップ缶振って出てきた夏の空	八 田
パレードの警備田植の進み行く	由 川
初蝶ってどこか夜明けのうす明かり	小 林
深彫りの切子のグラス新樹光	石 澤
勿忘草昭和はじめの童謡よ	杉 山
田毎の月四十兆個の核のごと	保 科
リラ冷えに友の訃報やおのが道	杉 山
娘が帰り姑の骸残りし夏	横 田
雑念はミルクケーキに入れ笑う	こばやし
沈黙を破って闇の白牡丹	高 瀬
いつからか父の歩を待つ青時雨	三 島
ポニーテールを初めて結う日花林檎	若 田
	郁
	智
	潤
	星来

